

農作物技術情報 第7号 畑作物

発行日 令和7年9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 大豆 葉の黄化が始まっています。ほ場観察をこまめに行い、成熟状況の確認、青立ち株や雑草の抜き取り、ほ場排水の徹底など、収穫作業に向けた準備を進めましょう。
- ◆ 小麦 小麦のは種適期を迎えています。適期を逃さず作業を行い、生育量の確保に努め、赤かび病に強い健全な小麦を生産しましょう。条件が整わずは種が遅れたほ場では、は種量を増やし、目標株立数の確保に努めましょう。

大豆

1 生育概況

子実肥大は概ね順調に進んでおり、葉の黄化が始まっています。

2 収穫作業の前に

(1) 台風対策

例年 10 月は台風の発生が多い時期となりますので、今後とも気象情報を確認し、状況に応じて排水対策など、事前事後対策を徹底してください。

(2) 雑草、青立ち株の抜き取り

アメリカセンダングサ、シロザ、ヨウシュヤマゴボウなどの大型雑草は、収穫時に汚損粒の発生や作業の妨げになるので取り除き、次作の発生源とならないよう種子をつけた雑草はほ場から搬出してください。

また、青立ち株も汚損粒の原因となりますので、雑草と同様に抜き取ってください。

(3) コンバインの清掃

収穫作業の前には必ず清掃点検を実施し、作業に支障が出ないか確認しておきます。

また、土をかみ込んだ時など、収穫作業中でもコンバインの清掃が必要となることがあるので、清掃のポイントを把握し、効率的に行えるようにしておきます。

(4) 乾燥・調製施設の確認

乾燥・調製施設を利用する場合には、その稼働計画について確認し、ほ場の様子を踏まえた上で、刈取りの順番、収穫機械やオペレーターの確保等、準備をすすめておきます。

3 収穫

(1) 成熟期の判断

適期収穫には、成熟期を正確に判断することが重要です。莢を振ってカラカラ音がするようになったら、ほ場内の数カ所で実際に莢をむいて確認し、次の2つから成熟期を判断します。

ア ほ場のほとんどの株で、大部分の莢が熟色になっている

イ 莢の中の子実が乾燥子実の形になっている

成熟期を確認したら、表 1 を参考に収穫作業に入ります。

表 1 成熟期からコンバイン収穫適期までの日数

品種	成熟期からコンバイン収穫適期までの日数		収穫(適)期間
	早限	晩限	
ユキホマレ	7～10 日後	20～25 日後	10～18 日
ナンプシロメ	10 日後	20～25 日後	10～15 日
シュウリュウ	10 日後	20 日後	10 日
リュウホウ	10 日後	20 日後	10 日

※成熟後、「リュウホウ」はしわ粒が発生しやすく、「シュウリュウ」はやや裂莢しやすいので収穫適期になったら速やかに収穫します。

(2) コンバイン収穫のポイント

ア 収穫時の茎水分は 50%以下

茎水分が 50%を超えると、こぎ胄で茎がもまれて茎汁が発生し、汚損粒の原因となります。このため、青立ちした株は必ず抜き取ってください。茎水分 50%以下の目安は、分枝が手でポキポキと折れるときです。

イ 収穫時の子実水分は 18%以下

収穫時の子実水分は 18%以下を目標とし、高くとも 22%以下で収穫します。なお、子実水分が 20%以上の場合は、つぶれ粒を主体とする損傷粒が多くなり、15%以下の場合は、裂傷や割れ豆などが多くなる傾向があります。

ウ 収穫の時間帯は茎葉がよく乾いた頃

晴れた日の場合、午前 10 時過ぎ～午後 5 時頃までが目安です。茎水分が高いため朝夕は避けてください。

4 乾燥

(1) 乾燥

子実水分が高いものを急速に乾燥させると、裂皮粒やしわ粒発生の原因となります。子実水分を均一に低下させるよう、子実水分18%までは急速な乾燥を避け、通風による予備乾燥（毎時乾減率 0.5%程度）を行います。

(2) 被害粒発生のしくみ

被害粒のうち、裂皮粒（写真 1）は、収穫前に、大豆の生理的な要因で種皮が部分的に裂けて生じるもの（例：莢数不足あるいは刈遅れによる過熟が発生）と、高温通風など乾燥調製時の急激な乾燥によって生じるものに大別されます。

しわ粒は、子実のへその反対側の子葉組織と種皮がギザギザになる「ちりめんじわ（写真 2）」と、種皮が吸湿により亀甲状に隆起する「亀甲じわ（写真 3）」に大別されます。

「ちりめんじわ」は主に、生育後半の地力の減耗や窒素吸収量の低下により発生するため、この時期の栄養状態の改善が対策となります。

「亀甲じわ」は子実形成から収穫期前後までの乾燥・吸湿の過程で、皮と子実の収縮・伸長の繰り返しが原因で生じますので、刈遅れを避けることが対策につながります。



写真1 裂皮粒（皮切れ粒） 写真2 しわ粒（ちりめんじわ） 写真3 しわ粒（亀甲じわ）

5 その他

(1) 紫斑病対策

成熟期以降、刈取りが遅れると紫斑粒が増加しますので、刈遅れを避けることが重要です。

また、ビーンカッターや手刈りで収穫した場合、速やかに脱穀・乾燥を行います。島立てやハウス乾燥中の刈株も、朝露や湿気などにより紫斑粒が徐々に増加することが知られています。

小麦

1 は種適期

は種期が遅くなると、年内に確保できる茎数が少なく、穂数不足による減収や、根張りが少ないため、凍上害にあうことが多くなります。

小麦も稲と同様に、主茎の葉齢によって発生する分げつ数が決まっており、越冬前の主茎葉齢は4葉以上、分げつは1～2本を確保することを目標にします。地帯別のは種適期を表2にまとめました。適期を逃さずは種作業を行い、越冬前に生育量を確保してください。

表2 県内の地帯別は種適期

地 帯	は種期(月日)	
	早限	晩限
高標高地	9月15日	9月25日
県北部	9月15日	9月30日
県中部及び沿岸北部	9月20日	10月5日
県南部(沿岸南部)	9月25日	10月20日

ナンプコムギで発生しやすい縮萎縮病は、は種後30～40日間の気温が高く、降水量が多いと翌春の発病程度が高まります。このため、ナンプコムギをやむを得ず連作する場合、被害軽減のため、できるだけは種適期内の遅い時期には種してください。この場合、茎数確保のためは種量は標準の3割増しとします。ただし、適期を過ぎたは種は根張りが劣り、湿害や干ばつ害を受けやすくなりますので注意してください。

2 もしも適期を逃したら・・・は種時期が遅れたときの考え方

- (1) は種適期を守るのが基本ですが、ほ場条件が悪い場合、無理には種しても出芽不良を招きますので、その場合は作業を見合わせます。
- (2) 適期が過ぎてしまった場合は、各地帯のは種晩限から1週間遅れるごとには種量を1割ずつ増やし、目標出芽本数を確保できるよう努めます(表3)。

表3 品種別のは種量と目標出芽本数

品種名	は種量 (kg/10a)		目標出芽本数 (本/m ²)
	ドリルまき	全面全層まき	
ナンプコムギ	4～6	5～8	70～110
ゆきちから	6～8	8～10	120～160
銀河のちから	6～8	8～10	120～160
ナンプキラリ	6～8	8～10	110～150

3 基肥

麦類の施肥は、追肥の占める割合が高く、基肥は越冬前の生育量を確保するために施用します。

標準的な施肥量を表4に示していますが、土壤改良目標値を満たしたほ場での施肥管理は、「補給型施肥基準」を適用することができます。補給型施肥

とは、「ほ場からの収穫物による肥料分の持ち出し量」と浸透水による「土壌養分の溶脱量」を施肥によって補給する、という考え方を基に作られた施肥基準です。この施肥基準では、堆肥と化学肥料を区別することなく、含まれる肥料成分の合計で施肥設計しますので、堆肥の活用で肥料費を抑えることも可能です。詳しくは最寄りの農業改良普及センターにお問い合わせください。

表4 麦類の標準的な基肥量（成分 kg/10a）

窒素 (全域)	リン酸		カリ (全域)
	中南部 転換畑	中北部 普通畑	
4～6	10～15	15～20	10～12

※水田から転換して初年目、2年目の「ゆきちから」の基肥は、茎数確保のため窒素 6 kg/10a とする。

4 雑草防除

は種後は、必ず土壌処理剤を散布します。もし、降雨などでは種直後に散布できなかった場合は、小麦の出芽後でも使用できる除草剤がありますので、ほ場が乾いたら早めに散布を行ってください。

5 排水対策

ほ場内の明きょは、は種後に施工することも可能です。小麦を部分的に潰してしまいましたが、収量への影響はほとんどありません。



写真4 ほ場内小明きょの施工例

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

**忘れずに！点検・確認・安全管理
無事故で終える収穫作業**

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。